歌集 なぎ

特217
545

始

# 歌集なぎ

北島葭江著

特
545

特217
545

帝國圖書館藏

# なぎ

歌集

北島葭江著

東京 春陽堂發行

昭和一〇・五・廿五 帝國圖書館藏

# なぎ目次

大正二年——九年三月
兵庫縣三田中學校教師時代　二十七首　（一—一〇）
大正九年四月——十一年三月
神戸女學院專門部教師時代　二十二首　（一一—一八）
大正十一年四月——十三年三月
山形高等學校教授時代　四十五首　（一九—三四）

大正十三年三月――昭和八年三月
廣島高等學校生徒主事時代　百卅一首　（三五―七九）
昭和八年四月――九年七月
廣島高等學校教授時代　三十七首　（八〇―九二）
昭和九年八月――十年一月
廣島高等學校退職後　三十八首　（九三―一〇六）
卷末に題して　（一〇七―一一二）

山岐那の望遠り ょ城山津

## 大正二年——九年三月

### 兵庫縣三田に在る頃

妻と初めて郷里に歸る、二首。

泣く子われのもりしこの山なぎの山と妻にゆび
さす秋晴のそら

たらちねの世ごと家ごと言よさす身となりてま
さにさびしかりけり

私立三田中學校に赴任し、翌年寮生監となる。
各寮は同一學年の生徒を限り、入學より卒業ま
で收容す。吾は大正四年入學生徒の寮に入る。

新婚の妻とうつりて寄宿舍に人の子をもる身と
なれりける



はろばろと家ゆさかりて稚兒らのさびしき心お
もはざらめや

家さかり母をこひ泣くわく兒らをなぐさめかね
つ夜は更けにけり

病める兒は母をおもひてさびしけむ妻のかたへ
に臥さしてあはれぶ

盗癖の生徒を親のまへに打ち親もろともにわれ
も泣きける

盗癖のこころゆがめるこの稚兒あはれとはおも
へ放ちあへむやも

わく兒らはすでに稚兒にあらざりきあまへの心
を聲帶は裏切る



本能の大き力はしやちこばる師道をわらひて寮
に巣くひ始めたり

おちつかぬもの羞ぢごころ燥狂の破壊のおこな
ひもだしく吾は視る

堪へぬ身にすすしきほひて生徒らと長距離競走
もその頃始めたり

大正七年胃潰瘍を病む、八首。

こみあげしもののかたまりのなまぐささ吐きつつ見れば くされたる血なりき

野中のくらき電燈柱によりわれは吐き吐くくろき血潮を

たちまちにおもはざらめや祖父叔父姉も死にけむこれのやまひを



京都大學病院に入る

ゆゆしわれに胃癌の系統ありやとふ中西博士の言のさびしさ

ほとほとに病はいゆれ胃のこりのやすくはとけじと聞けばおほほし

雨はれて夏さりにけり衾衣のしみのしみみいぶせむ長きこやりを

退院のわれを迎ふと來し妻の夏衣すがしも窓の
さみどり

大空はうちあがりて青し身は癒えて夏衣かろく
われは道ゆく

## 校庭雜事

秋されば松茸おほきこの山に雉子のこゑを朝な
さなきく



はしり出の山の裾わになばとりてこの朝さむし
あつものに煮む

作業時につくりし庭園の木ぶりややととのひぬ
れば子ら去らむとす

一つ家に五つとせすみし生徒らはよろこびきほ
ひ今は去りゆく

しかすがに名殘り惜しけむわが妻にものはえい
はず泣きし子もあり

寮生の出でいにし部屋のさんらんにさびしきこ
ころとどめかねつも

やりどころなき心よりくりやべに妻の茶をきる
手傳ひにけり



大正九年四月――十一年三月

神戸女學院教師となりて、
蘆屋の山腹に家を營む。

蘆屋雜見、七首。

山ひらき植ゑし垣ねのかなめもち朱き芽はふけ
ど家はたたぬらし

若葉ふく風をよろしみ外に出でて草ひかむとす

日曜の朝

草ひきて肌を汗じみ家に入れば眼こそくらけれ

冷えのすがしさ

捨てられたる猫

はに山の朽葉の中ゆなく子猫うらら春日をこゑ

立てなくも



さいなみの兒らの手にすら喉ならす飼はるるさ

がの猫はかなしも

大戰後富國强兵、都會の男女しづ心なし。

いにしへの菟原處女は今はなしここだますらを

手玉にとらすも

うつし世のをとめの塚に植ゑむ樹は枝さはにし

て四方になびかむ

あひは見てあきつといへば足ずりてそらみつと
なきし大和にはあらじか

鳥居素川氏の生前死後に、四首。

さびしけむ心はのらず堪へ堪へてことなげにい
ます君はともしも

あがごとく子らはなけども犬を飼ひ鸚鵡とかた
る君はともしも



くれなゐの燃ゆらむ花ををしとのる君が情熱(こころ)の
やりどころなるらし

親しみやすく親しみがてにおもひつつ君とさか
りて會はずなりにけり

雜見、十首。

さにづらふ小女(をとめ)子はまことのらぬらしこぶるが
さがとなれるかかなし

あからびく小女子が伴と春の野を行きつつもと
なさびしきわれは

はに山の日かげほがらになりぬれば都の人も山
に來てあそぶ

木の芽ぶく息かあるらむ打ちけぶる森の木末よ
海光る見ゆ



部屋ぬちの物ことごとにところ得てともしびあ
かし心なごみぬ

さ庭べの葉は朝月にぬれぬれて土にあへなく霧
はなづさふ

霜枯れし菊のみだれの根もとゆも小さき花のな
ほ咲かむとす

菊ひきて庭ひろびろししかすがに菊のかをりの
ほのかにただよふ

酒米をしらぐと峡の水車場に馬力車のぼるらし
馬嘶ぶこゑ

霜どけの道をなづみてつぎつぎに馬力車つどへ
り馬のいばゆる



## 大正十一年三月—十三年二月

### 山形高等學校に教師となる。

おほやけの人とはなりたれわたくしの人なりし
むかし慕はしかりけり

十年の私學教師やここに來てまどふこと多くめ
ざましかりけり

印を捺すことのしげきや官立はおきて正しくかしこきろかも

印袋妻にぬはせて持たりけり日にけにつとめおろそかならじと

海陸軍の學校ならずて教官のこごしかる名はこにもありけり



教官となりにし日よりわがくせの野立ちのゆばりは止めむとおもひき

桑の芽のめぶく春べとなりぬれど藏王の山ゆ雪は散り來も

桑の芽のめぶく昨日はのどけかりし今日はかきくらしはだれ雪ふる

この地櫻桃の産地、初夏紅黄の小玉累々枝は在り。

さつきのわかき葉かげゆさにづらふつぶら木の
實は見るにをしかも

つぶらつぶら櫻桃の實のうるるころは都こほし
と吾はおもはなくに

櫻桃のつぶら木の實はははそばの母におくらば
めでかたまはむ



このくには紫苑の花の散るとも雪降る國ぞ秋
はさびしき

しぐれの雨過ぎし藏王の山ひだのけやけき日か
げ見つつかなしも

よすがらのあらしに木の葉落ちにけりまともに
見たる月山の雪

十二年一月郷里より山形に赴く途上、五首。

雪に埋もる峡(かひ)の村里さむざむとあかとき汽車に
見つつ過ぎたり

さめて見る雪の國ばら夜はあけて一直線に汽車
は走れり

こちごちの里に未だもきえぬ電燈(ひ)は夜あけの雪
に光つれなし



さむざむと新聞を賣る米澤の朝のホームは乘る
人まれなり

ホームの吹雪に立ちて兒のために溫かき牛乳を
買ひにけるかも

たゞ雪の野つ原なるに雲雀なく春は來たるらし
うらぐはしもよ

半歳の雪は消えそめて玄土は息づくごとく今日にひらけゆく

入學試驗採點、審査は學校内にて行ふ規定なり。

採點に一日のつかれおぼえたり夕辨當のことおもひつつ筆とる

三たびよみ返したれども點の標準定まらなくにこころいらだつ



鉛筆をおきてしましく戸外に立てり夜の空氣は心なごましむ

大正十二年九月關東大震災の直後、杳として消息なき同僚の教授某を捜索すべく東京横濱地方へ出張を命ぜらる。十四首

たゞ看る焼きただれたる東京のいづち向きてかあが友もとめむ

あらがねの焦げたる土に晩夏の陽は炎々として
はてなくかがよふ

澁谷に岡本信二野氏の避難所を尋ねて遇ふ。

大いなる日の光あり君と我と生きてありとおも
ふ今日のよろこび

焼けあとの晝のいきれに堪へざれど月ひえびえ
と夜は秋なり



眼にをしき青きものなし焦土のほこりにあえて
さまよふわれは

震災後初發の汽車はわれを乘せて川崎鐵橋にか
かりたりけり

鐵橋は搖れてきしめり幾たびも汽笛ならして汽
車はとまりつつ

横濱驛前半燒の倒壞家屋に死者あり。

生きの糧の午食くふと箸もちてうつばりに壓されて死せる人はも

溝渠の材木の間より死屍腐爛して漂ふ。

おしせまる焰のがれむ一すぢに水によりけむ墓とは知らなく

此の夜保土ケ谷の姪一家らの避難場に來り一泊す。

ここにして燒野の都かたさかり蟲の音をきくさびしかりけり



避難場の野風呂に月はおし照れり少なき水に汗を洗ひける

晝はものめづらしみあそべる子夜はおびえて母により添ふ

二十四日、捜索效なく都を去らむとす。

まぎまぎて友あらなくに焦土を冷たき雨にぬれつつわれゆく

汗にあえて日には十日をまぎし友あらなくかな
し吾は歸りなむ

上野驛より汽車に乘る、濡れたる避難民を見て

堪へたへてありし都を落ちて行く雨におびゆる
人あはれなり

寮生盲腸炎に腹膜炎を併發して命危し。午
前一時擔架によりて縣病院に運び、我れ立
合ひの上切解手術を受く。



瞬の間のいのちあやふき子をもりて病院に來た
り雪の夜更けて

玻璃板に並ぶるメスの冴え返るつめたき光を見
つめてわれ居り

たらちねの親に代りて汝がいのち見まもるわれ
やしづ心なき

言絶えて呼吸にのこる生命の緒やメスのひびき
は聞くにたへむやも

縫合了りて重たき息をわれ吐けりすべての音の
よみがへり來る

或る時

をさびとはうぬぼれ一つもつものか下僚へつら
ふにたづきよければ



大正十三年三月―昭和八年三月

廣島高等學校に轉じて生徒
主事となる。

居を比治山東麓に定む、三首。

山鳩はしづかにも鳴くか春山のはにの小道は朝
じめりして

われの來ておどろかすものか朝山のこのしづけ
さに餌ひろふ鳥を

御便殿の廣庭に未だ日はささず櫻の花は露にお
もたし（二十七八年戦役大本營内明治大帝の御便殿を山上に奉安す）

此の夏居を臺屋町河畔に移す、七首。

さし潮みち潮ひき汐汐干しほこそは同じしほな
れこころけに見ゆ



夕しほにいやつぎのぼる荷足舟はだかで飯くふ
かこのやからは

ひた押しに河流どよもしさす潮のこちごちにお
どる大き魚はも

汐こそひけ朝の川床ぬれぬれて中洲に白く死魚
の光れり

夏終りに近づきて河水いよいよ少なし。

汐ひきてはつはつのこる川淀の灯影さびしく秋さりにけり

ひきしほの流れの早さ見る見るにかぼそくなりて川のむなしき

朝の潮はしづかに澄めり大き魚のゆくらに泳ぎていよいよふかし



事にふれて、三首。

むかし己が醜のおこなひ知らぬがに人嘖ぶ教師われみづからをいやしむ

むかしとは我はいはなくにこのころぶ汝が行を明日まねばざらめや

しかおもひやすらひがてにかつ汝を罪しをはりぬわが心くらし

一年三遷牛田村に住む、七首。

籠鳥はのどにさへづり家内には人も居ぬらし朝寝せるかも

菜をひくとけふの晴れ日を畑に出て人いそしめり霜近みかも

安樂寺に大銀杏樹あり

銀杏の大いなる樹の冬枯れのしろき日ざしはさびしきものを



銀杏の冬木のうれに一ときは群鳥さわぎ飛び去りにけり

冬枯の銀杏の根の日だまりに朝鮮人が乳くくませて居り

向つ家の破風に居る鳩ひねもすに動かむとせず病めるにかあらむ

ひねもすにこもり居し鳩夕まけて見えずなりに
けりいづち行きけむ

大正十五年五月十日　聖上陛下なほ
皇太子にましまして本校に行啓をた
まはる。かしこみて、四首。

今日のためさや敷くかどの砂をきしみ皇子の御
車近づくらしも



天つ日嗣皇子のみまへに立てるわれ光榮をばお
もへただにうつぶす

わが大君皇子のみそなはす生徒隊は風のなぎた
る林のごとし

大き光榮をみあとにとどめ御車は今ししづかに
去りいますなり

すみとほる五月の空の眞日の下松のみどりはき
ほひ立ちたり

庭樹みなにほひふふみて芽立ちたりあさけの土
のまなこに明るく

くれおそき五月の空のかがよひに羽音つばらに
飛べる蟲あり



事にふれて、二首。

ただ理非をわれはあらそへ利をもとむとおもは
れをるらし論はやめなむ

理非をすてて利害につくといふことが社會の實
際を知ることとなるらし

眞夏日の片かげりたる庭におり朝顔の鉢に水を
やりたり

水をやればやゝやゝに葉のよみがへり大き蕾の
張りきらむとす

大正十五年九月市内皆實町高等學校官舍にうつる。

芭蕉葉のそよぎやまざるいく夜ありて今朝見る
山の影のさやけさ

たをれふす芋の廣葉に露しとどかまつかの葉に
蝗はうごかず



酒に豪放を衒ふ生徒亂れて警察にひかる、戯笑、二首。

猪の皮をかがふる羊の子警察のをりにして剝が
れけるかも

酒によりて虎は夢みし捕はれて猫のをつつに還
りけるかも

しんしんと降り積む雪にとなり家の門とづる音
夜は更けぬらし

あかときのこのしづけさよ昨夜の雪積みにけら
しも音のくぐもり

或る時、二首。

人まへに罪をかぞへて生徒らをたけびころびぬ
わがこころさびし

全生徒にいつかれむよはそこばくの知己に師道
は生くべくありなむ



十餘日の出張より歸りて、

妻も子も夏着して吾をむかへたり長旅はてて歸
るその戸に

雨あがりの地べたのぬくさ蛙子は生れ出でにけ
りきほひて飛ぶも

麥うれて雨をあかるみ日ねもすにいづち雲雀は
鳴きやまずけり

かきくらしまさでに雷はひびけども雨降らぬ日
のここだ久しき

空鳴りの雷の下より照れる陽は立ち枯れの田に
つれなきものを

ここにしてまともに見たる遠山の雨乞ひの火は
かなしかりけり



遠山の雨乞ひの火は炎々と燃えにさかりて夜は
更けにけり

床上に下駄を履く生徒の悪習戒むれどもきかず、眼に觸るるに從つて沒收の約をなす、二首。

教室に生徒のはける下駄をとりわれいきどほり
焼きすてにけり

焼け焼けて炭となりたる下駄の殼消えまく欲れ
どありの久しき

事にふれて、二首。

あらそひにもころ兒の頭を打ちて泣く勝利の悲
哀は兒らももちけり

暗き道すぎこしわれや今にしてここだくのなや
み子の上にもつ

ある時、五首。

青年のひたむきごころみちびくに勝へぬ身われ
や師の道に立てる



さばかむの正しき名にぞわたくしのひそみ居ら
ずやとわれはくるしる

ストーブの消えたる部屋に母と子が去りもあへ
ずてわれに泣きける

母と子の去る夕影はさびしけれ砂利ふむ音のさ
くさくとして

この峡により添ひ立てる二軒家の米とぐ水やか
けひにほそし

寂しさにたへたる兒らは庭鳥を抱きて遊べり白
きめどりを

或る時、四首。

事しあればいさかひ絶えぬ師と弟子の道うとま
しくわれなれりけり



ゆるされてけふあるわれぞ人の子をゆるしてぞ
われは生くべくありなむ

おさふればはねむとすらむ若竹の眞日(まひ)の大空ひ
たさしのぼる

なかなかにまげぱまぐべき若竹のなほきすがた
をわれはこひむな

人の子をさばき歸れば灯ともせりわれはもだし
く夕食に向ふ

閑を得、終日山路を逍遙す、七首。

杉むらを出づれば羊齒の谿にしてしぐれの雨に
降られけるかも

羊齒の葉のしゞになだるる深谷のしじまの底の
せせらぎの音



羊齒の葉は時雨にぬれてただ青しみそささいな
くここの谷間に

羊齒生ふる谷の向ひの山くえのはににあかるく
日は照りて居り

日ねもすに陽ざしいく時あらねばか峽の畑の大
根はやせたり

この峡により添ひ立てる二軒家の米とぐ水やか
けひにほそし

寂しさにたへたる兒らは庭鳥を抱きて遊べり白
きめどりを

或る時、四首。

事しあればいさかひ絶えぬ師と弟子の道うとま
しくわれなれりけり



ゆるされてけふあるわれぞ人の子をゆるしてぞ
われは生くべくありなむ

おさふればはねむとすらむ若竹の眞日(まひ)の大空ひ
たさしのぼる

なかなかにまげぱまぐべき若竹のなほきすがた
をわれはこひむな

松山城、五首。

この城にいつ植ゑにけむ樫むらの古城となりてしげりしげれる

樫若葉朱きもありてかがやかし夏蟬の聲は空にひろごり

張りつめて目白鳥秀つ枝に高音なく五月は生きの力あふれたり



天守閣は冷えびえとくらしここに居て夏日みなぎる國原を見る

この山に自働車の道つくるらしすゞし樹蔭もあゆみなやむか

或る時、三首。

小猿すら曲藝し得て拍手待てるらし人も飼はれて手柄をきほふ

おもむけて人をほむるとふへつらひは物乞ふ犬
の尾をふるよ見ぐるし

面むけて人をそしるはなめしけどひたむき心な
しとおもはなくに

放けなれしよひの戸とざしさやさやと降り出し
雨の音をききたり



寢足らはぬいく夜はありて雨となるこよひはや
すくうま寢せむかも

秘かに讀書會を設け思想的秘密出版物を講ずる生徒あり。秘密結社の罪に問はれて拘禁せらる。其の中一人最も重く、糾問月を經たり。檢事局に於て彼れと面會す。

ただなほきまごころもたるこれの子が淺黄の獄
衣着むとおもへやも

しましくは子はうつむけり見つめたる我が眼(め)に
なみだ流れ居たりけり

他人(ひと)の子とおもほえむやは赤化學生もまさしく
われのはぐくめる青年(こ)なり

其の中四人先づ釋放せらる。その當日小森檢事正より眞心あつき訓戒をきく。

檢事正の部屋につどへる親と子らけふゆるされ
の心ほがらに



檢正事のうつしきさとし親も子も涙にたへてわ
れも聽き居り

裁判所の玄關出づるより堪へ得たる涙ながれて
せむすべ知らず

わたくしに人をさばかぬ法官のなほき心ぞよる
べかりける

久にして眠足らひぬ霜土のなごみて庭に朝の日
あかるし

五時間を生徒らとあらがひぬあひとけて打ち出
づる校門に月のさやけき

昭和五年四月閑を得作北の湯原温泉に遊ぶ、九首。

温泉宿に我れをおろしたる乗合自働車はこよひ
の雨にここに止まるらし



大き樹の屋根やおほふらし遠くより吹きよする
嵐のここにどよめく

一ときのあらしはやみて名残りの雨さびしき町
の灯に散らひ居り

よひの雨に水をぬくみかたぎつ瀬の音にも立ち
て河鹿鳴くなり

その聲に耳とめきけば上つ瀬のはろかにもまた
鳴きつぐ聲あり

つぎつぎに鳴きづる河鹿こひ居れば旅ねともし
く夜ぞ更けにけり

石いまだつめたき春の川床の野天の湯よりゆげ
ほのにほふ



昨夜(さ)の雨にふふみほどけて山ざくら岩垣淵にか
げをおとせり

湯上りのすがしきこころバスによせ朝冷えの峡(かひ)
をわれは通るも

教師われ自らを嘲ふの歌、三首。

しらじらと玉葱の皮をむきて居り教壇に立ちて
月に日にけに

不眠症によしといふものぞ玉葱のかをり嗅がさ
は質義はやみなむ

奥ゆきのなき店もかざるショウウヰンドウは政
治家も持てり教育者も持てり

この窪にひさしく栖める雨蛙ひそかに見つつた
のしむわれは



眞夏日の乾きにたへぬ雨がへる如露の水やれば
身を起しけり

この庭に雨を呼ぶ聲は多けれどこの雨蛙の聲を
われはけに聞く

石打てばかいかいと鳴きし雨蛙この頃なれて鳴
かずなりにけり

生徒我を嗤うて蟹といふ自ら戯れよめる、二首。

月夜よみこころも腸(わた)ももぬけつつ濱びさわたる
蟹はともしも

うつし世は横に行くこそやすらけれひたむき行
けば踏みつぶさるる

或る時、三首。

國をおもふと政治家のすることわからねばわれ
は家のこと三面記事をよむ



かけひきを知らぬ教師に政黨と株屋のことはわ
からぬらしき

日曜は朝だにしづかにありがほし放送局はいぢ
わろしうとめ

吉野紀行、九首。

まぎまぎて草鞋(わらぢ)得がてに喜佐谷ゆくつずれ足を
ひきつつ吾(あ)がゆく

うつし世の旅はあはただし草鞋ゆもケープルカ
ーによるべくあるらし

すくすくときほひ立ちたる杉むらの木下にすき
て細き流れあり

深谷よ生ひ立つ杉の樹の間ゆも風の道ありここ
の涼しき



草によする身はすがすがし靴ぬぎてつかれたる
足につめたき石ふむ

夏枯れの吉野の山の宿坊のこよひの客はわれひ
とりならし

蚊帳ぬちの疊しろじろとして廣きかな旅のやす
さをしみじみと味はふ

これの藪の月光しろし溪水のふかみの音にここ
ろ落ちつく

たたなはる上の山にも人住めるらし夏の夜なれ
か灯のかがやけり

或る時、四首。

ねびしれていきどほりえぬませ人は蚯蚓にも似
たり猫にも似たり



いきどほるはおろかなれどもさかしらにねびて
媚ぶるになほまさりけり

いきどほりの心に堪へて秋晴れの明るきにはに
蹴球を見る

ひたむきにきほひて蹴れるこの球の高きバウン
ドはこころはるけしむ

比治山散歩、三首。

冬されば林の道もひとりなりいささ小草に風の
かそけく

冬されば地になづみ來る鳥多し木末どよもす風
のしげきに

比治山の樹の間ゆ傳ふむれ鳥のかろきこころの
ともしくもあるか



事にふれて、二首。

ことごとにつかれゆゆしみかにかくに一と日す
ぐすが師の道得たるか

あきうども己が立つる道にいそはけりほがひぞ
ただよふかの日この日を

寢足らはぬあかとま窓よ放けて看るややにしら
みゆく雲のながれを

昭和七年十一月姉岡山縣林野町に死す、六首。

皓々と大輪の菊しづもりて通夜する人のほとほと寢たり

庭の菊はあかとき雨にそぼぬれて通夜の朝けの目にあはれなり

はらからと生れ來しものをかなしかもうつそみのわれは姉を燒くなり



秋雨のしき降る峽の火葬場に燒けいます姉をおきて去らめやも

峽を出でてかへり見すれば雨霧に姉を燒く火のうすあかりせり

里人の飲みてののしるはうぶりのみけのむしろにわれも坐りける

昭和八年四月―九年七月

四月生徒主事を辭し、教授に留りて双葉山北の自宅に移る。

雜感

十年の重きつとめのゆるされて山の若葉にこころやすめけり



朝床に山のうぐひすききて居り日ごとのつとめゆゆしくもあらず

山峽の家にうつり來て朝なさな井戸水をくむすがしかりけり

子をつれて山に登れば草も木もしたしかりけり若葉かをりて

夏空にひろごる桐の廣葉ぬき咲けるむらさき花
のすがしさ

大きなる桐の青葉にむらさきの花落ちたまり雨
にぬれたり

山峽は霧ふかくして夜すがらを蛙の聲は雨よび
やまず



蛙の聲ややにしづもり眠をさそふ夜ふかき風は
ひえびえとしてよし

針鼠の如き教師の生活を自ら嘲るの歌、三首。

犬すらも吠えておびゆる人を見ば犬にしかじと
思ふなるべし

犬すらも吠えていきまく人を見ば犬なみなりと
思ふなるべし

犬に如かず犬なみの人の多けれは師の道犬に喰
はれ死ぬべし

樹のすきてそぞろに寒き夕暮れはとなり家の灯
のしたしかりけり

たまたまののどけき日なり背戸あけて菜をぬく
人と立ち話しせり



葉の落ちてあらはなれども冬の陽のしみらつめ
たし庭の苔の面

障子はる縁に日かげのうつろひて糊につめたき
水をさしたり

なめらかに糊はとけたり夕まけて茶の花の香の
ほのかにほふ

十二月二十三日皇太子殿下御降誕を欽びまつりて、四首。

あなたぬしあなさやけ天つ日嗣の皇子あれます
ときく今朝のなぎたる大空

天つ日に月の光もうちそひてさがしき國のあゆ
み照らさね

常はきかぬラヂオも聞くか日の皇子のみあれこ
とほぎうからやからと



校長の皇子のみあれのほぎ言をうれしみかしこ
み兒は母にかたる

この年十二月某日我兒學校にて鎖骨を挫折し、三十日間ギプスを嵌めて通學す。

挫骨の手にギプスを嵌めて中學の受驗準備に子
はいそしめり

この頃の學校道具かさだかに片手なえたる子は
あはれなり

挫骨の苦にたへていそはく子を見ればたたかひ
にきほふ力のくしくおもほゆ

寒の靄ゆふべなづさふ冬木立受験準備の子をわ
れ立ち待てり

しろじろと息はきてバスをおり來る子なつかし
くわれにより添ひ歩む



たまたまに心のどけくあらたまの年をむかへて
子らと遊びけり

有馬温泉にて、五首。

みんなみの山越しの陽はこの裾にかげろひ早く
春も寒けれ

この山のそともの櫻見てこしかここはふふめり
朝霜のして

麥ややに莖に立ちたれ午いまだ陽ささぬ畑に水霜おけり

共同湯は夜こそことにぎはへれ明かき灯見つつ道を行きたり

溫泉場にひく管よ立ちまふ湯けぶりは朝冷えの空にあたたけく見ゆ



おし照れるさつきの月夜さやけけれ庭の牡丹はうるみふふめり

しづかなる日の光かも牡丹花は咲きにさかりてさゆるぎもせず

午後の陽に咲きはだけたる牡丹花のそのくれなゐぞかなしかりける

このあさけ牡丹の花はみな落ちてしづかに雨は
降りゐたりけり

ころころころろ鳴きでし蛙ききて居り寢ほしきこ
ころ床にたへゐて

人に連れられ、向つ丘上の稻荷社に到り賽すれば、我が爲に祈禱せむといふ。戯れて

山の上の稻荷の賽をはむはふり狐つきとや吾を
見つらむか



昭和九年八月―十二月

昭和九年八月二日、二年餘に
亘り糾紛せる廣島高等學校の
教授を辭す。

官を辭するの日、四首。

大阪の朝日新聞社の前に立ちわれ退官の辭令を
見たり

辭令見てすなはちひろへるタクシーは夏のちま
たを滑らに走れり

寶塚の温泉宿の湯に入りてこころおだしく妻に
手紙かく

生きのたづき念はざるにはあらねどもいぶせき
道の今ひらけたるをおもふ



しき雨のをやみとなりて夜くだちを一つこほろ
ぎ鳴きいでにけり

こもりゐてたまに出でこし町の店ほかげしたし
く菊かざりたり

或る時

胃擴張をやむかもうつし世の青年(こ)らは彼食(かく)ひこ
れ食ひ味は知らなく

## 京都旅行、三十首。

扇畑忠雄君の下宿に留まる。

ひとり來てさびしき雨にあひにけり忠雄により
て宿からむとす

しましくは生きのたづきも忘らえて忠雄と語れ
ば夜ぞ更けにける



忠雄君の居間に隣れる空室に起臥す。

物置かぬ八疊の間の起きふしはかかはりもなく
心のどけし

朝ごとに近郊の野中の新しき錢湯にゆく。

朝戸出の霜ふむ足はつめたけれ身はすでにあり
浴槽の中に

心ぐく浴槽の中よながめ居り窓越しの日光にゆ
げ立ちまふを

京都市内到る所簡易食堂ありつきて食をとる。

朝湯でて食堂の土間にくふ飯はふかふかとして
あたたけきかも

妻もなく子もなき人の食(を)すといふ食堂のめしを
われも來てくふ

出るも入るも世辭とふことはいはなくに心たら
ひにただ汁をすふ



ひさびさに來し京極の夜の灯(ひ)はうらぶれの身わ
れにさびしかりけり

京極の正宗ホールわがごとくわかき人と飲む老
いもありけり

湯豆腐は忠雄すき燒は山崎と酒のまぬわれは二
つながら食ふ

畫家某と京極の喫茶店に入る。女給冷淡なるを
某の憤りしかば、戯れて。

サーヴヰスは女給のものとおもへかも今の教授
はそれし生徒にささぐる

某は日本畫家なり。現岡崎公園開場の帝展出品
の悪傾向を説いて頻りに慨歎す。答へて

加茂川は友禪模様のさらしどころ繪筆は折りて
そめものいそはけ

嵯峨竹林の風害を見て、

俯々と並(なら)み立ちてありし竹(たか)むらのとざまかうざ
またをるるはかなし



倒れては葉こそ枯れたれ竹の幹のたへて青きは
さびしきものを

偶々親しき舊友二人と會し比叡山に登る。

冬さびの山なみ遠くいやつぎて目に入りきたる
ケーブルカーの中

冬がれの國原とほくゆく川のさむざむとして光
ればかなし

たまきはる命かそかにたもちつつ冬枯れの草に
鳴かぬ鳥あり

深谷の木立のすきて明るきは下草霜にかれたる
なるらし

鳥の聲冬さびにけり學寮を僧ひとり出て山をく
だりぬ



大嵐のあとだにとめぬ杉むらに根本中堂はしづ
もり立てり

結界の冬のさびしさ杉むらのこちごちに伽藍そ
き立ちしづもり

くもり日の山のつららはしみさびて伽藍の間ゆ
僧も通はぬ

冬さびの杉むら深く啼きし鳥何にの鳥かもあと
はきこえず

妙見堂は杉むらひらけ明るけれしみみにあをき
苔のさびしさ

くもり日の山のしづけさみづうみの船の波音も
きくべかりけり



みづうみの奥がはくもりしろじろと船のゆげ吐
くは汽笛鳴らすらし

くもり日の湖はものうしにぶいろの水はろばろ
と波さへたたず

にぶいろにたたふる湖のきはまりて水落つると
ころかそかにしろし

ケーブルカー下山

山川はやゝやゝに消えてせばみつつ一つの谷に
われは下り來し

昭和十年の元旦に

ただなをき太青竹をあらたまの歳の始めに床に
生けたり

しづかなる山にむかひてわれおもふとはに滅び
ぬわざをとげて死なむと



# 卷末に題して

私は歌人ではない。私は今日まで歌人として作歌に精進する程の暇と熱意とを缺いで居つたことを告白する。學生時代には竹柏園風から明星派風のものを好んだ關係から、後にはこれ等の派から出た木下利玄や川田順や北原白秋、諸氏の詠に心を傾けるやうになつた。大正八九年頃に或る關係から水甕に投書したが、それに掲載せられる歌と、捨てられる歌とが自分の考へと反することが多いので、歌は私には解らないものにしてやめてしまつた。所がその中に山形高等學校に赴任することになつて、自分の育つた中國地方とは全く異つたその山河の情景がもの珍しくひどく私の感興をひくので、其の情感を何かに表現して見たいといふ氣持がしきりに動いて來た。その情景の中に浸りその氣持で當時讀んだものが齋藤茂吉氏の歌集であつた。すつかり感

心してしまつて、それからアララギ風の歌を詠むやうになり、今までのものも改作して見る程の心持になつて來た。併し其の後とても、この歌集に見られるやうに私の歌は頗る雜駁なもので、率直にいへば、今日でも殊に自分の歌となると、果してどんな歌が良いのか悪いのかの自信さへ有つて居ないといつてよい。廣島高等學校に赴任してから生徒の短歌會に出席して餘儀なく自分の歌を發表したり、事に觸れて詠んだものを何かに書きつけたが、其の時限りで散亂してしまつて居つた。中村憲吉氏にも一度歌會でお目にかゝりが、自分が時時歌を詠んだり、歌に關係したことをラヂオで喋つたりしながら、而も不精で不熱心で歌に本氣になれないことを甚だ恥しく思つて。その後一度もお會ひせずに永久に訣れてしまうことになつて、切角近くに居ながちお訪ねもせず、指導も受けなかつたことは、相濟まぬこととも殘念なことも思つて居る。

斯んな風に、私は歌が好きでありながら、生徒主事といふ忙がしい職務に



在つだせいでもあらうが、やり放しで、その詠草も殆んど散逸しかけて居つたのを、集めて見たらどうかといふ卒業生もあつて、それ等の人々がわざわざ集めて書き出してくれた好意に對し、このまゝに措けば、復散亂してしまうだらうとの恐れも出て出版して見る氣になつた。

私は中學教師として傍ら五ケ年、高等學校教師としてその間に十一ケ年生徒を監督する役を仰せつかつて、始めは嫌々ながらその職に就いたがやつて見ると生徒に對する愛着の念が深くなつて來て、こんなに永く其の職務に鞅つて來た。併し私は今の高等學校の生徒主事の適任者ではなかつた。一つの問題には唯一つの答案といつたやうに、生きた人間の出來事を何もかも規則に當て嵌めて、事務的にビシビシ運んで行くことは私の過去の曲折した經驗が許してくれなかつた。私の經驗と、私の自己批判の結果とは、一つの事に餘りに多くの答案を持合せるか、時としては全く白紙を出すの餘儀なき狀態に陷らしめた。私の執つた唯一の道は全てのしやちこばつた形式の殼を破つて、殉教者の覺悟で赤裸々の懺悔の自分を生徒の前に投げ出して行くより外

になかつたのである。私はそれが若い人々の智德兩方面にせめてもの經驗のよい教訓を垂れ得るものだと信じて居つた。—丁度自己否定の哲學が道德的人格的に最も大きな寄與をなしつゝあることを考へながら。私は生徒を擲つた。痛罵した。叩頭した。謝罪した。口角沫を飛ばして激論もしたし、心から和解して握手もした。私はどの生徒に對しても倨傲であつたと共に又虚虚であつた積りである。頑强であつたと共に隔心を挾まなかつた積りである。そして私はあさましい手段や阿諛を以て生徒を威服したり、懷柔したりするやうな卑劣な心は持たなかつた。それは二十餘年間次々に私に接した若い人々の誰もが認めて居てくれるだらうとの安心を以て言ひ得ることである。

併しそれは今は過去のことである。私は二年前に生徒主事を辭し、半年前に教授をやめよとの事でやめた。私の二十三年間の教員生活は到る所で餘りやつきになり過ぎると誹られもし、笑はれもした。今人生の滿期を過ぎてやうやく眼を覺ますと、文字通りの無一物を自ら苦笑する悲喜劇の道化役者の最後の幕を勤め果した所であつた。此の歌集は前に言つたやうに卒業生の人



人の勸めによるのであるが、此の機會に過去の自分の教師生活を記念しようとの意味も新たに加はつて來た譯である。そして卒業生諸君の苦心の蒐集と私がノートの端や、紙片に書き放しにしておいたもの凡て六百餘首の中から三百首を拔いてこの歌集を編むことにした。拔いたといつても優れたものといふ意味ではなく、私の過去の教員生活を表はすに適當と考へたものを主としたので、從つて私的の肉親に關するものは多く捨てた。又其の意味で連作のものが多い。集めて見ると隨分嫌だと思はれるものもあるが、年を取つて過去の生活に愛着を有つやうになつたせいか、又捨て難い氣もする。私が過去に於て生徒を鞭つことは一層酷しく自分を撻つことであつたと共に、人を誹り、社會を罵ることは更に之がやがて自分を抉剔することである。即ち自分の教員生活の自省であり批判である。私はその意味に於ても此の歌集に愛着を感ずる。その愛着の中に又私の鄕里の最高峰で「那岐山」といふのがある。孤獨であつた私の幼年時代の搖籃ともいふべき慕しい山である。そして私の波瀾の多い心の生活が今漸く凪ぎ初めたといふ氣持もする。それが此の

集に「なぎ」の名をつけた所以てある。私を知つてくれてゐる人々、殊に若い人々にこの歌集が私の眞の姿を髣髴さしてくれることが出來たら、私にとつてこれに越した悅びはない。終りに臨んでこの集の編纂に勞をかけた方々に厚く謝意を表するものである。

昭和十年二月

著者



昭和十年二月廿五日印刷
昭和十年三月十日發行

歌集なぎ奥附
定價五拾錢

著者　北島葭江
東京市日本橋區通三丁目八番地

發行者　和田利彦

印刷者　三宅正義
廣島市白島九軒町官有六二ノ六

版權所有

發行所　東京市日本橋區通三丁目八番地　春陽堂
振替口座東京一六一七番

終